２０２３年3月２６日　Ｎｏ.３６６０　週報上掲載

先週の講壇から　　〝人間と同じ者〟

フィリピの信徒への手紙 第２章１節～11節

聖句「…自分を無にして、僕の身分となり、人間と同じ者となられました。へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。」(2:7,8)

１．《偉人伝》　昔の小学生は、二宮金次郎や野口英世などの「偉人伝」の本を読まされたものです。アフリカでの医療活動に生涯を奉げた、アルベルト･シュヴァイツァー博士の伝記は必読書でした。ところが、彼が有名な新約聖書学者でもあり、高名なオルガン演奏家、バッハ研究者でもあったことを知って驚きました。鈍い私などは、同名の別人とばかり思い込んでいたのです。

２．《召命感》　24 歳で教会の牧師、二十代後半には大学の神学部で教鞭を執り、聖書学の著書を発表しますが、赤道アフリカの原住民の病苦の惨状を知ると、30 歳を過ぎて医学を志し、36 歳で国家試験をパスすると、安定した生活と職業、世間の名声や地位も捨てて、妻と共にランバレネーに診療所を開きます。その地で亡くなるまで、半世紀以上も現地医療に従事します。資金が不足すると、ヨーロッパで演奏会と講演会を開いて支援金を集めました。どうして、そんなことが出来たのでしょうか。神さまの召命を受けたのでしょう。「天は二物を与えず」と言いますが、呼び掛けに従う人には、神さまは惜しみなく与えられるのです。

３．《遜る心》　パウロは「キリスト賛歌」と呼ばれる詩文を引用しています。当時の教会で「信条」のように唱えられていたか、讃美歌として歌われていた詞でしょう。「へりくだる」は「下の方に身を置く」の意味です。自ら進んで他者に仕えることです。その同じイエスさまに、私たちもまた出会っているのです。人は自らの弱さを隠そうとして、却って居丈高になったり、乱暴に振る舞ったり、高飛車に物を言ったりします。イエスさまは「ゲツセマネの園」で、御自身の弱さを隠そうとは為さいませんでした。他方、弟子たちの裏切りを見越した上で、彼らの信仰の再生を祈られたのです。いつも自分のことばかり考えている、弱い私たちですが、少しでも周囲の他の人たちに心を寄せる者でありたいと思います。

朝日研一朗牧師